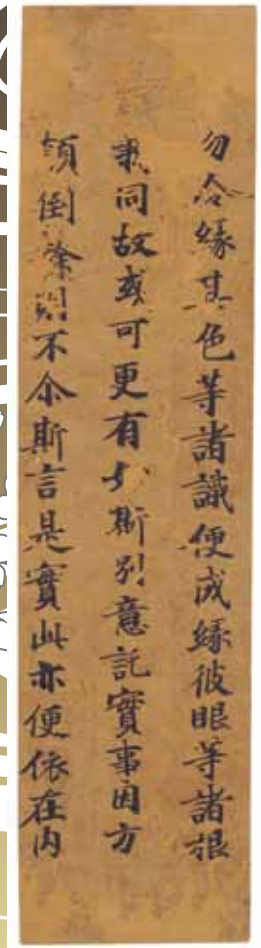
龍神楊貴妃伝 より

熊野三山楊貴妃信仰説

蓑虫



©蓑虫工房

はじめに

この小冊子は、筆者の想像している龍神村の楊貴妃渡来仮説である「龍神楊貴妃伝」の一部、「熊野三山信仰が楊貴妃信仰である」という証明を、熊野三山信仰に興味や知識を持っている方々のために、抜粋し再編したものです。

一目見て、長いと感じられるかもしれませんが、ほとんどは、参考資料です。本文自体は、十三ページにおさえました。

後半の参考資料は、意味が理解が出来なかったり、疑問や興味を持った方、納得がいかなかった方にむけてのものです。一般の方は、読み飛ばしていただいてかまいません。

ここに書いたものは、龍神楊貴妃伝のほんのわずかな一部分にしかすぎません。

それでも、ここに書いてあるお話は、従来の一般的に考えられている熊野信仰を信じている方にとって、驚天動地のものであろうと思います。そして、熊野三山の研究をされている方にとって、新鮮な考慮すべき重要な仮説になっているはずです。

くだらない話かどうか・・・・最初から読まずに済ますのではなく、どうか読んでからご判断をお願いします。

２０１６年　吉日　筆者敬白

目　次

本編

中国の楊貴妃生存・渡来説・・・・

本編
熊野三山楊貴妃信仰説

世界最高の美女の１人とされる楊貴妃が、中国で死なず、日本に渡ったという話は、おそらく、皆さんは聞いたこともないでしょう。知っている人でも「義経生存説」や「キリスト渡来説」と同じようなものと、考えているかもしれません。

しかし、楊貴妃生存・渡来説は、日中双方に伝えられており、そして、それが、きわめて古くから伝えられているお話です。

中国の楊貴妃生存・渡来説

中国の正史である「旧唐書」や「新唐書」に、楊貴妃が死んでから１年半後、玄宗上皇が、楊貴妃の墓を改葬しようと墓を掘りおこしたところ、そこに、楊貴妃の遺体がなかったと書かれています。（資料１　旧唐書・新唐書　列伝　后妃抜粋）

楊貴妃の生存説は、楊貴妃の史歴上の死である「安史の乱」の最中からあったと考えられます。

楊貴妃の同時代人である杜甫は、楊貴妃の史歴上の死の次の年、７５７年に「哀江頭」という詩の中で、楊貴妃が行方不明になっている事をうかがわせる文章を残しています。（資料２　杜甫　「哀江頭」）

さらに、約５０年後、白居易（白楽天）は、楊貴妃と玄宗皇帝の物語を読んだ「長恨歌」という詩を書きました。この「長恨歌」の中で白居易は、楊貴妃が黄泉の国に行かず、仙女となり、蓬莱で暮らしている様子を描いています。（資料３　白居易　「長恨歌」）

白居易は、友人である陳鴻に依頼し、さらに小説「長恨歌伝」を書かせました。その「長恨歌伝」

のあとがきで、白居易は「長恨歌」と「長恨歌伝」を「皇史」とは違う隠された歴史を伝えようとする意志の元に書いたと述べています。（資料４　「長恨歌伝」あとがき）

この長恨歌の中に書かれた玄宗上皇が楊貴妃を捜しに方士を蓬莱に送る話は、楊貴妃が生命を落とした安史の乱の時代に少年期を過ごした李益という詩人も、「過馬嵬二首」という詩に詠っています。（資料５　李益　「過馬嵬二首」）

このように、楊貴妃が生きのびて蓬莱に渡ったという噂は、楊貴妃が亡くなったとされる直後から始まって現代まで続いています。

中国では、この蓬莱が日本であるという説があり、「山口百恵が楊貴妃の子孫である。」など、今も、テレビなど様々なメディアで取り上げられています。

写真
中国中央テレビが放映した楊貴妃の特集番組より

日本の楊貴妃生存・渡来説

日本で、楊貴妃生存・渡来伝説で有名な地として、山口の油谷（ゆや）町があります。

この油谷町には、楊貴妃の墓と伝わる五輪塔があり、また、楊貴妃の菩提を弔うために作られたと伝わる釈迦如来像と阿弥陀如来像があります。

そして、現在ではあまり有名ではありませんが、名古屋の熱田神宮には楊貴妃の墓とされる石塔があったと伝わり、鎌倉時代の末期に書かれた天台宗の仏教書である「渓嵐拾葉集」に熱田明神が楊貴妃であると書かれ、室町時代に描かれた古絵図にも楊貴妃の石塔が描かれています。（資料６「渓嵐拾葉集」抜粋）

日本における楊貴妃の渡来伝説は、少なくとも、鎌倉時代までには遡ることが出来る古い伝説だという事がわかります。

この熱田神宮の楊貴妃伝説は、熱田神宮が蓬莱であるという伝承に由来するそうです。

熊野は、皆さんが、ご存知のとおり、古来から日中の双方から、徐福のやってきた蓬莱であると知られています。山口の楊貴妃伝説も、油谷町が、熊野の古語読みである「ゆや」という名前で、そこで、ここが楊貴妃が来た蓬莱だと考えられたのではないかといわれています。

さらに、中国には、楊貴妃が隠れ住んだ土地が、熊野であるというお話が伝わっているようです。

そうであるなら、本家本元である熊野に「楊貴妃渡来伝説がない」という事は、きわめて不思議で不自然な話ではないでしょうか？

私は、この理由を、「楊貴妃が熊野に来た」と古代の人々が、本気で信じていたためではないかと想像します。

楊貴妃の時代の日本は、吉備真備や阿倍仲麻呂などの有能な人材が唐の国に渡り、鑑真和上など優れた人物が、海を超えて日本にやってきていました。

日本は、現代のアメリカとの関係のように、唐の国と友好関係を結んでいました。

玄宗皇帝から死刑命令を出された楊貴妃が、生きて日本に亡命していたとしたら、これは、現代でいえば、国際指名手配犯であるウサマビンラディンが生きて、日本に匿まわれているようなものです。

もし、本当に、楊貴妃の生存・亡命があったとしたら、それは、日中の政府の双方で絶対の秘密とされたことでしょう。

写真
楊貴妃が熊野に隠れ住んだと書かれた中国の本。
赤線部分に注目

湯の峯温泉を楊貴妃の湯と呼んだ藤原頼資

鎌倉時代の初期、湯の峯温泉を訪れた藤原頼資（よりすけ）は、この湯を「不異驪山温泉（りざんのおんせんにことならず）」と讃えています。（「頼資卿記（よりすけきょうき）」承元4年（1210）10月8日条）

「驪山温泉（りざんおんせん）」とは、楊貴妃が玄宗皇帝から賜ったという華清池（かせいち）を指します。

現在、この文章は、「楊貴妃の浸かった驪山（りざん）の華清池（かせいち）とはこのような温泉であったに違いない」と訳されています。

しかし、あるいは、頼資は、「この温泉こそ楊貴妃が浸かった驪山の華清池に違いない」と言ったのではないでしょうか？

三足烏と西王母

熊野というと、貴方は、何を想像しますか？

おそらく、多くの人が、三本足の八咫烏を想像するのではないでしょうか？

しかし、八咫烏には、大きなカラスという意味はありますが、三本足という意味はありません。

いったい、八咫烏が三本足であるというのは、どういうところから来ているのでしょうか？

中国には、古くから三本足のカラスの信仰があります。「千字文」という中国から伝えられた文字の手習書に書かれた李暹（りせん）（6世紀（西暦500年頃）の人）の注釈には、「太陽の中には三本足の烏

がいる、それで太陽を金烏（きんう）と呼ぶ。太陽の色は赤く、扶桑（ふそう）（中国の東方の海中にあるという神木）から登り、咸池（かんち）（天にある池で、太陽が水浴するという）に入る。」とあります。

熊野の古語である「ユヤ」は、陽谷・・・すなわち、太陽の隠れる谷・・・三本足の烏の棲む咸池の意味があるのではないかと言われています。

鄭州にある漢代の画像石には、一つの場面に、右側には扶桑（ふそう）の樹にのぼる三本足の烏が、左側に九尾の狐が、並べて描かれています。

写真
三足烏、九尾狐、
鳳凰畫像（漢代）
鄭州市博物館所蔵拓本
京都大学
人文科学研究所
所蔵資料

真ん中に西王母、右に三足烏、左に
九尾狐、下に蝦蟇（ガマガエル）

写真
四川省成都市新都区出土
西王母画像

写真
四川省
雅安高頤墓阙及石刻
九尾狐三足烏

真ん中に西王母、右に九尾狐
下に蝦蟇、左下に三足烏

写真
四川省成都県
新繁清白郷1号墓出土
画像磚西王母像後漢

このように、三本足の烏と九尾の狐、それから、月に棲むという金色の蝦蟇（ガマガエル）が並べて描かれる画像が、いくつもの中国古代の図画に見られます。金烏や九尾の狐、ガマガエルは、古代中国の伝説の美女であり、女仙である「西王母」に使える存在と考えられていました。

考えてみれば、熊野には三本足の烏だけではなく、阿須賀神社や奥熊野玉置神社ではキツネが、新宮神倉神社ではガマガエルが使いとなっています。

ここから、私は、昔の人は、熊野に西王母を祀っていたと考えます。（解説1　西王母について）

写真
新宮阿須賀神社
稲荷神（写真右側舎）

写真
奥熊野玉置神社
摂社・三柱神社（三狐神）

神社の摂社として、稲荷神が祀られているのは、めずらしくなく、あたりまえだと感じられるかもしれません。
しかし、それは、江戸時代、稲荷神が商売繁盛の神として、流行し、続々と、建てられたから生じた現象です。
阿須賀神社の稲荷神や玉置神社の三狐神は、「玉置山権現縁起」に記されており、稲荷神流行の時代より前のきわめて古いものである事がわかっています。

写真
新宮神倉神社
ゴトビキ（ガマガエル）岩

楊貴妃と西王母

私は、楊貴妃は西王母と同一視されていたと考えます。

詩仙と讃えられる李白は、宴席に呼び出され、楊貴妃の前で、その美しさを西王母に例えた詩を詠んでいます。（資料7　李白「清平調三首　其一」）

その李白の友人であった杜甫も、楊貴妃を西王母に例えた詩を残しています。（資料8　杜甫「奉同郭給事湯東靈湫作　其二」）

そして、楊貴妃の生涯を詠んだ「長恨歌」を詠んだ白居易は、完全に、楊貴妃と西王母を一つに結びつけています。（資料3　白居易　「長恨歌」）

長恨歌で、楊貴妃は、「太真」という名前の仙女になって暮らしている事になっています。この太真という名前は、玄宗が息子の嫁だった楊貴妃を自分の物にするために、仮に与えた道教の出家名なのですが、西王母は、道教の信仰の中で、「太真西王母」とも呼ばれているのです。さらに、長恨歌には、「転じて小玉をして双成に報ぜしむ」と楊貴妃に仕える仙女として、「小玉」「双成」の名前を挙げていますが、中国の伝説には「董双成」という笙の名手として古くからよく知られた西王母の侍女がいるのです。

（解説2　董双成について）

「董双成」
中国古典人物白描画譜
載敦邦著より

そればかりではありません。

長恨歌には、「七月七日、長生殿。夜半人無く私語の時」とあります。

この7月7日（七夕）の夜に逢瀬を楽しむ話は、西王母と漢の時代の皇帝である武帝の間にも伝えられています。長恨歌では、玄宗を唐の皇帝ではなく、漢の皇帝と書いてありますが、これは、現政権(唐)をはばかっただけではなく、この西王母と武帝との交情 をふまえたものでもあったでしょう。（解説3　西王母と武帝の伝説について）

長恨歌で、楊貴妃が西王母と同一であるとされたのは、決定的だと思います。

長恨歌は、平安時代、日本でも大変よく読まれていました。

清少納言の「枕草子」や、紫式部の「源氏物語」には、明らかに、「長恨歌」を意識して書かれた文があります。（資料9　清少納言「枕草子」紫式部「源氏物語」抜粋）

長恨歌が、この時代、日本の貴族達の間で、ベストセラーになっていた事は、疑いありません。

清少納言や紫式部が活躍していたのは、上皇や法皇、貴族達の熊野信仰が盛んになる少し前の時代です。

楊貴妃が西王母と同体である事は、長恨歌を通じて広く知れ渡っていたでしょう。

熊野に西王母が祀られ、それが楊貴妃と同一視されていたのだとしたら、「熊野三山信仰」の正体は、すなわち、「楊貴妃信仰」に他ならない。

私は、そう考えます。

五衰殿の女御の伝説

熊野三山信仰が楊貴妃信仰である事を裏付ける証拠として、「五衰殿（ごすいでん）の女御」の伝説があります。

五衰殿の女御のお話は、室町時代の始め頃に成立したと考えられる「神道集」に収録される他、「熊野権現縁起絵巻」に描かれています。（解説４「熊野権現縁起絵巻」五衰殿の女御の伝説について）

この五衰殿の女御のお話は、熊野の神の起源をあらわした物語で、物語の舞台は、天竺（インド）のマカダ国とされているのですが、王には、千人もの后がいたにもかかわらず、五衰殿の女御（善法女御）ただ一人を愛し、夢中になってしまったために、残り九九九人の后の恨みを買い、そのため、国は乱れ、王は、女御の処刑を認めざる負（お）えなくなるのです。

このお話は、玄宗皇帝と楊貴妃の逸話とよく似ています。

長恨歌に「三千の寵愛一身にあり」と詠われるように、玄宗には、三千の后があったとされますが、楊貴妃一人に夢中になってしまったために、国が乱れ、玄宗は楊貴妃の処刑を許さざる負えなくなるのです。

五衰殿の女御の魂は、その後、熊野に飛来して、熊野の神となるのですが、もしも、楊貴妃が熊野に祀られているのだとしたら、「五衰殿の女御」のお話は、その事をあらわしているのではないでしょうか？

五衰とは、天人の長寿の末に迎える死の直前に現れる五つの兆しのことをさします。

能に「楊貴妃」という演目がありますが、その演目の中で、楊貴妃は、五衰した末に、人間界に生まれ変わった天女だとされています。（資料10　能「楊貴妃」抜粋）

このことからも、私には、五衰殿の女御の正体が楊貴妃であるという疑いが、ますます強くなるのです。

「熊野権現縁起絵巻」和歌山県立博物館所蔵
寛永十四年（1637）成立

中辺路「熊野古道館」の展示より

楊子薬師縁起（お柳さんの伝説）

楊子川の畔に「楊子薬師」があり、そこにお柳さんの伝説があります。（解説５　お柳さんの伝説について）

お柳さんは、三十三間堂の棟木になったとされているのですが、実際の三十三間堂の棟木に、柳は使われていません。ですから、ただの荒唐無稽な創作民話だと片付けられていますが、お柳さんの伝説は、浄瑠璃の「よこぞねの平太郎」「熊野権現開帳」「都三十三間堂棟由来」、「祇園女御九重錦」、歌舞伎の「柳女九重錦」、鶴屋南北の書いた「玉藻前祇園公服」等に取り入れられています。そして、三十三間堂では、正月一七日に「楊枝のお加持」という「楊枝」で、観音さまに祈願した法水を参拝者に注ぐ儀式が行なわれています。

この物語が、なんの由縁もないただの伝説とは思われません。

物語は、三四回もの熊野詣を行なったとされる後白河法皇が、熊野権現の夢のお告げを受けるところから始まっています。

私は、このお柳さんの伝説を、後白河法皇の柳の女神（楊貴妃）信仰を示していると考えます。

楊貴妃の楊は、柳の別字です。柳眉、柳腰（やなぎごし）など、楊貴妃の美しさは、しばしば、柳で例えられます。お柳さんの正体も楊貴妃と考えてよいのではないでしょうか？

後白河法皇に夢のお告げをした熊野権現ですが、これは、京都東山にある今熊野観音寺の十一面観音であったと伝えられています。

今熊野観音寺は、現在、天皇家の菩提寺で、御寺と呼ばれる泉涌寺の敷地内にあります、

泉涌寺は、鎌倉時代の初期に源頼朝の家臣であった宇都宮信房が月輪大師俊芿に寄進して出来たお寺なのですが、今熊野観音寺は、創設が平安時代の初期であると言われ、この泉涌寺の前身であるとも伝わっています。（ただし、創設の頃は、東山観音寺と称していたそうで、今熊野観音寺の名前は、後白河法皇が付けたのだそうです。）

この泉涌寺に、国の重要文化財にも指定されている聖観音像、別名「楊貴妃観音」があります。

楊貴妃観音像は、白檀の木を使った寄せ木作りの観音像で、玄宗皇帝が、楊貴妃の面影を偲ぶために作らせたものだという伝承があります、

実際には、楊貴妃観音は、構造からみて、南宋時代に造られたらしいと言われています。しかし、そうであっても、この楊貴妃観音が存在する事が、熊野信仰の隆盛期である平安末期～鎌倉時代初期に、楊貴妃信仰が存在したことを裏付けていませんか？

楊貴妃観音のある泉涌寺の前身が今熊野観音寺であり、楊子薬師伝説と結びついている・・・このことが、お柳さんの正体が楊貴妃であり、熊野の楊貴妃信仰を示していると考えますが、いかがでしょうか？

写真
泉湧寺「楊貴妃観音像」
鎌倉時代初期　寛喜２年（１２３０）渡来と伝わる

おわりに

いかがだったでしょうか？

おそらく、「熊野三山信仰が楊貴妃信仰である」という仮説が、ただの妄想として片付けられないという事を、少しは、御理解していただけたのではないかと思っています。

しかし、最初に書いたように、この小冊子に示した「熊野の楊貴妃信仰」は、「龍神楊貴妃伝」のごく一部であり、入り口であるにすぎません。「龍神楊貴妃伝」では、この他、「熊野の犬飼・千代定」の正体、「三枚月・三体月伝説」の意味、熊野の主神である「家都美御子大神」「結神」の正体、これらを楊貴妃信仰で説明しています。

そして、「龍神楊貴妃伝」は、熊野の事ばかりではなく、「高野山」「伏見稲荷」そして、もちろん、「田辺・龍神村」の謎、「野馬臺詩」「九尾の狐伝説」「吉備入唐伝説」「日本に渡ってからの楊貴妃の生涯」にいたるまで、残された伝説や伝承、記録、物証をもとに、解き明かしています。

興味を持っていただけましたら、インターネットで、知見をまとめたものを公開しておりますので、「龍神楊貴妃伝」で検索いただくか、サイトアドレス（http://www.minomusi.net/youkihi/）を御覧ください。またフェイスブック「龍神村楊貴妃伝説」(https://www.facebook.com/ryujinyoukihi)では、さらに、新しい知見を発表し、考察・検討を続けています。

ご意見等を、いただけましたら幸いです。

資料編

資料1　旧唐書・新唐書　列伝　后妃抜粋

旧唐書

上皇密令中使改葬於他所。初瘞時以紫褥裹之，肌膚已壊，而香嚢仍在。内官以獻，上皇視之淒惋，乃令圖其形於別殿，朝夕視之。

訳文

上皇は、密かに中使に命じて（楊貴妃の墓を）他所に改葬させた。初め瘞めた時には、紫の褥を以て之を裹んだのだが、肌膚はすでに壊れてなく、香嚢のみがなお残っていた。内官は、（香嚢を）以て（玄宗に）献じた。上皇は之を視て嘆き悲しんだ。乃ち、その形（楊貴妃）を別殿に描かせ、朝夕、之を視ていた。

新唐書

密遣中使者具棺槨它葬焉。啟瘞，故香嚢猶在，中人以獻，帝視之，淒感流涕，命工貌妃於別殿，朝夕往，必為鯁欷。

訳文

密かに中使者を遣わし（楊貴妃を）葬った所に棺槨を具えさせた。瘞めた所には、ただ、香嚢のみがあっただけだったので、中人は、是をもって（帝に）献じた。帝は之を視て、凄まじく涙を流し、別殿に妃の容貌を描かせ、朝夕そこに行くと、必ずすすり泣いた。

資料2　杜甫　「哀江頭」

少陵野老呑聲哭　少陵の野老聲を呑んで哭す
春日潛行曲江曲　春日潛行す曲江の曲
江頭宮殿鎖千門　江頭の宮殿千門を鎖す
細柳新蒲為誰綠　細柳新蒲誰が為にか綠なる
憶昔霓旌下南苑　憶ふ昔　霓旌南苑に下り
苑中萬物生顏色　苑中萬物顏色を生ぜしを
昭陽殿裡第一人　昭陽殿裡第一の人
同輦隨君侍君側　輦を同じくし君に隨って君側に侍す
輦前才人帶弓箭　輦前の才人弓箭を帶び
白馬嚼嚙黃金勒　白馬嚼嚙す黃金の勒
翻身向天仰射雲　身を翻し天に向って仰いで雲を射れば
一笑正墜雙飛翼　一笑正に墜つ雙飛の翼
明眸皓齒今何在　明眸皓齒今何くにか在る
血污遊魂歸不得　血汚れて遊魂歸り得ず
清渭東流劍閣深　清渭東流し劍閣深し
去住彼此無消息　去住彼此消息無し
人生有情淚沾臆　人生有情淚臆を沾す
江水江花豈終極　江水江花豈に終に極らんや
黃昏胡騎塵滿城　黃昏胡騎塵城に滿つ
欲往城南望城北　城南に往かんと欲して城北を望む

意味

少陵の野老たる自分は咽びそうな声を押し殺しながら、春の一日曲江のあたりをしのび歩く、川のほとりの宮殿は門を閉ざしたまま、柳や蒲が芽吹いているのは、果たして誰のためだろうか。

思い起こすに、かつては霓旌（天子の御旗）の一団が南苑に下り、苑中の万物が華やかに輝いたものだった。昭陽殿裡第一の人たる楊貴妃は、玄宗皇帝と同じ輦（天子の乗る車）に乗って付き従っていた。輦前に控えた才人は腰に弓箭を帯び、白馬は黄金の轡を嵌めていた。才人の一人が身を翻し天に向かって矢を射ると、一対の翼が楊貴妃の笑顔の前に落ちてきたものだ。

あの明眸皓歯（明るい瞳に白い歯）の人はいまどこにいるのだろうか、血は汚され魂は遊離したまま二度と戻らない。渭水は東へと流れ劍閣の谷は深く、去るものは茫々として消息もない人生の転変のむなしさが涙を催させる。江水江花は極まりがないというのに、いま黄昏の城内には胡騎（胡の軍隊）が塵をあげてのし歩いている。自分は城南に行こうとして思わず行在所のある北の方向を見てしまうのだ。

資料3　白居易「長恨歌」

漢皇重色思傾國　漢皇色を重んじ傾国を思う
御宇多年求不得　御宇多年求むれども得ず
楊家有女初長成　楊家に女有り初めて長成し
養在深閨人未識　養われて深閨に在り人未だ識らず
天生麗質難自棄　天生の麗質おのずから棄て難く
一朝選在君王側　一朝選ばれて君王の側に在り

回眸一笑百媚生　眸を回らして一笑すれば百媚生じ
六宮粉黛無顔色　六宮の粉黛顔色なし

春寒賜浴華清池　春寒うして浴を賜う華清の池
温泉水滑洗凝脂　温泉水滑かにして凝脂を洗う
侍兒扶起嬌無力　侍兒扶け起せば嬌として力なく
始是新承恩澤時　始めてこれ新たに恩沢を承けしの時
雲鬢花顔金歩搖　雲なす鬢、花の顔、金の歩搖
芙蓉帳暖度春宵　芙蓉の帳暖かく春宵を度る
春宵苦短日高起　春宵短きに苦んで日高くして起き
從此君王不早朝　此れより君王早朝せず
承歡侍宴無閒暇　歓を承け宴に侍して閑暇なく
春從春遊夜專夜　春は春の遊びに従い夜は夜を専らにす
後宮佳麗三千人　後宮の佳麗三千人
三千寵愛在一身　三千の寵愛一身にあり
金屋妝成嬌侍夜　金屋妝ひ成りて嬌として夜に侍し
玉樓宴罷醉和春　玉楼宴罷みて醉ひて春に和す
姉妹弟兄皆列士　姉妹弟兄皆な土を列ね
可憐光彩生門戸　憐れむべし光彩門戸に生ずるを

遂令天下父母心
不重生男重生女
驪宮高處入青雲
仙樂風飄處處聞
緩歌慢舞凝絲竹
盡日君王看不足
漁陽鼙鼓動地來
驚破霓裳羽衣曲
九重城闕煙塵生
千乘萬騎西南行
翠華搖搖行復止
西出都門百餘里
六軍不發無奈何
宛轉蛾眉馬前死
花鈿委地無人收
翠翹金雀玉搔頭
君王掩面救不得
回看血淚相和流

遂に天下の父母の心をして
男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ
驪宮高き処青雲に入り
仙楽風に飄へりて処処に聞こゆ
緩歌慢舞糸竹を凝らし
尽日君王看れども足らず
漁陽の鼙鼓地を動して来たり
驚破す霓裳羽衣の曲
九重の城闕煙塵生じ
千乗万騎西南に行く
翠華揺揺として行きて復た止まる
西のかた都門を出づること百余里
六軍発せず奈何ともする無し
宛転たる蛾媚馬前に死す
花鈿地に委せて人の収むる無く
翠翹、金雀、玉搔頭
君主面を掩ひて救うを得ず
廻り看て血涙相和して流る

黄埃散漫風蕭索
雲棧縈紆登劍閣
峨嵋山下少人行
旌旗無光日色薄
蜀江水碧蜀山青
聖主朝朝暮暮情
行宮見月傷心色
夜雨聞鈴腸斷聲
天旋日轉迴龍馭
到此躊躇不能去
馬嵬坡下泥土中
不見玉顔空死處
君臣相顧盡霑衣
東望都門信馬歸
歸來池苑皆依舊
太液芙蓉未央柳
芙蓉如面柳如眉
對此如何不淚垂

黄埃、散漫、風蕭索
雲棧縈紆、劍閣を登る
蛾媚山下、人の行くこと少に
旌旗光無く日色薄し
蜀江は水碧にして蜀山は青し
聖主朝朝暮暮の情
行宮に月を見れば心を傷ましむるの色あり
夜雨に鈴を聞けば腸を断つの声あり
天旋り日転じて竜馭を迴す
此に致りて躊躇して去る能はず
馬嵬坡下、泥土の中
玉顔を見ず空しく死せし処
君臣、相顧みて尽く衣を霑す
東のかた都門を望み馬に信せて帰る
帰り来たれば池苑皆旧に依る
太液の芙蓉、未央の柳
芙蓉は面の如く柳は眉の如し
此に対して如何ぞ涙垂れざらん

春風桃李花開夜
秋雨梧桐葉落時
西宮南苑多秋草
宮葉滿階紅不掃
梨園弟子白髮新
椒房阿監青娥老
夕殿螢飛思悄然
孤燈挑盡未成眠
遲遲鐘鼓初長夜
耿耿星河欲曙天
鴛鴦瓦冷霜華重
翡翠衾寒誰與共
悠悠生死別經年
魂魄不曾來入夢
臨邛道士鴻都客
能以精誠致魂魄
為感君王輾轉思
遂教方士殷勤覓

春風桃李花開くの夜
秋雨梧桐葉落つるの時
西宮、南苑、秋草多く
宮葉、階に満れども紅掃はず
梨園の弟子、白髮新に
椒房の阿監、青娥老いたり
夕殿に蛍飛んで思ひ悄然
孤灯、挑げ尽くして未だ眠りを成さず
遅遅たる鐘鼓、初めて長きの夜
耿耿たる星河、曙けんと欲する天
鴛鴦の瓦冷ややかにして霜華重く
翡翠の衾は寒くして誰と共にせん
悠悠たる生死、別れて年を経たり
魂魄かって来たりて夢に入らず
臨邛の道士、鴻都の客
能く精誠を以つて魂魄を致す
君王展転の思ひに感ずるが為に
遂に方士をして殷勤に覓めしむ

排空馭氣奔如電
上窮碧落下黃泉
兩處茫茫皆不見
忽聞海上有仙山
山在虛無縹緲間
樓閣玲瓏五雲起
其中綽約多仙子
中有一人字太眞
雪膚花貌參差是
金闕西廂叩玉扃
轉教小玉報雙成
聞道漢家天子使
九華帳裏夢魂驚
攬衣推枕起裴回
珠箔銀屏邐迤開
雲鬢半偏新睡覺
花冠不整下堂來
風吹仙袂飄飄舉

空を排し気に馭して奔ること電の如く
上は碧落を窮め下は黄泉
両処、茫茫として皆見えず
忽ち聞く海上に仙山有り
山は虛無縹緲の間に在り
楼閣、玲瓏として五雲起こり
其の中綽約として仙子多し
中に一人有り、字は太真
雪の膚、花の貌、参差として是なり
金闕の西廂、玉扃を叩き
転じて小玉をして双成に報ぜしむ
聞くならく漢家天子の使ひなりと
九華の帳裏、夢魂驚く
衣を攬り枕を推して起ちて徘徊す
珠箔銀屏、邐迤として開く
雲鬢半ば偏きて新たに睡より覚め
花冠整えず堂より下り来たる
風は仙袂を吹きて飄飄として挙がり

猶似霓裳羽衣舞
玉容寂寞涙闌干
梨花一枝春帶雨

含情凝睇謝君王
一別音容兩渺茫
昭陽殿裏恩愛絶
蓬莱宮中日月長
回頭下望人寰處
不見長安見塵霧
唯將舊物表深情
鈿合金釵寄將去
釵留一股合一扇
釵擘黄金合分鈿
但教心似金鈿堅
天上人間會相見

臨別殷勤重寄詞
詞中有誓兩心知
七月七日長生殿

猶、霓裳羽衣の舞に似たり
玉容寂寞、涙闌干たり
梨花一枝、春、雨を帯ぶ

情を含み睇を凝らして君主に謝す
一別、音容、両つながら渺茫たり
昭陽殿裏、恩愛絶え
蓬莱宮中、日月長し
頭を廻らして下、人寰の処を望めば
長安を見ずして塵霧を見る
惟だ旧物を将つて深情を表し
鈿合金釵寄せ将ち去らしむ
釵は一股を留め、合は一扇
釵は黄金を擘き合は鈿を分かつ
但だ心をして金鈿の堅に似しめば
天上人間、会ず相見えん

別れに臨みて殷勤に重ねて詞を寄す
詞中誓ひ有り、両心のみ知る
七月七日、長生殿

夜半無人私語時
在天願作比翼鳥
在地願爲連理枝
天長地久有時盡
此恨綿綿無絶期

夜半人無く私語の時
天に在りては願はくは比翼の鳥と作り
地に在りては願はくは連理の枝と為らんと
天は長く地は久しきも時有りて尽く
此の恨みは綿綿として尽くるの期無からん

意味

漢の皇帝（玄宗は唐の皇帝だが、白居易は、漢の皇帝に例えている）は傾国（国を傾けてもよいほどの美女）を得たいと望んでいた。しかし長年の治世にも得ることができなかった。

楊家の娘はようやく一人前になるころであったが、深窓の令嬢として大切に育てられ、周囲には知られていなかった。

しかし、天性の美は自然と捨て置かれず、ある日選ばれて王の側に上がった。

視線をめぐらせて微笑めば百の媚態が生まれる。これには後宮の化粧を施した美女達も色あせて見えるほどだった。

春のまだ寒いころ、少女は華清池の温泉を賜った。温泉の水は滑らかに白い肌を洗う。

侍女が助け起こすとなよやかで力ない。こうして晴れて皇帝の寵愛を受けたのであった。

やわらかな髪、花のような顔、少女の歩みにつれて金のかんざしが揺れる。芙蓉の模様のとばりは暖かく、皇帝は春の宵を過ごした。

春の宵はあまりに短く、日が高くなって起き出す。これより王は早朝の執政を止めてしまった。
少女は、王の意を受けて宴に侍って途切れる暇もない。春には春の遊びに従い、夜は夜で王の側に一人で侍る。
後宮には三千人の美女がいたが、少女は三千人分の寵愛をいまや一身に受けている。
金の御殿で化粧を凝らして、艶めかしく夜も侍る。玉楼での宴が果てた後、春のような気分に酔う。
彼女の縁戚はみな列士となり、輝かしい栄光が一族に訪れた。
遂には世間の親たちも、男児の誕生より女児の誕生を喜ぶようになった。

驪山の離宮は高所にあって雲に隠れるほどである。天上の音楽が風に乗ってあちこちから聞こえる。
のびやかな歌や踊り、笛や琴の音も美しく、王は終日眺めて見飽きることがなかった。
突如、漁陽の陣太鼓が地を揺るがして迫り、霓裳羽衣の曲を楽しむ日々は砕け散った。（安禄山が漁陽で兵をあげ、都にせめて来た）

王宮の奥にも煙と粉塵が立ち上った。（皇帝は都を捨て）車や騎兵の大軍は西南を目指していった。かわせみの羽で飾った天子の御旗はゆらゆらと進んでは止まり、都の西門を出て百里のあたりまで来た。
そこから、もはや軍は進もうとせず、如何ともしがたく、優美な眉の美女は天子の馬前で死したのであった。
（兵士たちが反乱を起こし、玄宗皇帝は、それを鎮めるため、楊貴妃に死刑命令を下した）
花のかんざしは地に落ちて拾い上げるものもなく、翡翠や金雀（金の雀の飾りのかんざし）、宝玉の髪飾りも同様であった。

王は顔を覆うばかりで助けることもできず、振り返る目からは血の涙が流れた。

黄色い砂塵が舞い、風がものさびしく吹きすさぶ。雲にかかるほどの険しい道を剣閣へと登る。
峨嵋山のふもとには道行く人も少ない。天子の御旗も今は光なく、日の光さえ弱々しい。
蜀江の水は深緑色、蜀山は青々としている。しかし、王は朝も夕も彼女を恋い慕って嘆いた。
仮御所の月を見れば心が痛み、夜に雨音を聞けば断腸の思いである。
世情が変わって天子の御車も方向を転じて都を目指すことになった。しかし心が引かれてこの地（楊貴妃の死んだ馬嵬）を立ち去ることができない。
馬嵬の坂の泥の中に、もはやかつての玉のように美しい顔（楊貴妃）は見ることができず、その跡がむなしく残るばかり。
君臣は互いに振り返りながら旅の衣を涙で濡らし、東に都の門を望みながら馬に任せて帰った。

帰ってきてみれば池も庭もみな元のままで、太液池の芙蓉（蓮）も未央宮の柳も変わりないのである。
芙蓉（蓮）の花は彼女の顔のよう、柳は彼女の眉のようで、これを見てどうして涙を流さずにおられようか。
春風に桃李の花が夜開き、秋雨に桐の葉が落ちる。
西の宮殿の南の庭には秋草が繁り、落ちた葉がきざはしを赤く埋め尽くしても掃き清める人もない。
かつての梨園の弟子もすっかり白髪が増え、椒房の女官（阿監、青娥）もすっかり年をとった。夕方の宮殿に蛍が飛ぶのを見ても（玄宗は）悄然として考える。ひとつ残った灯りをともしきってもまだ眠りに就くことができない。

時を告げる鐘鼓は遅々として夜の長さを思い知らせる。天の川はうっすら光って空は明けようとしている。おしどりの瓦は冷え冷えとして霜が真っ白に積もる。かわせみの夜具は冷え切っていて共に休む人もいない。

遥か遠く生死を分けてから幾年月、彼女の魂魄が会いに来て夢に現れることもなかった。

臨邛の道士が都に旅人として訪れており、祈れば、魂魄を招く事が出来るとして知られていた。

王が眠れぬ夜を重ねていることを案じていた人々は、彼に楊貴妃の霊を念入りに捜し求めるようにしたのである。

道士は、空を切って気流をとらえ雷のごとく天駆け、天に昇り地に入ってくまなく捜し求める。

上は空の窮みまで、下は黄泉まで探したが、どちらもただ茫々として果てなく彼女を見つけることはできなかった。

そのうちに道士は、海上に仙人の山があると聞き及んだ。山は何もないところにぽつんと在るという。

楼閣は玲瓏として美しく五色の雲が起こっている。その中にたおやかな仙女がたくさんいた。

その一人は名を太真といった。雪のような肌、花のような容貌、どうやら彼女が楊貴妃らしい。

道士は、金の御殿の西の棟に宝玉の扉を叩いて訪れ、小玉（見習い少女）を使いにして双成に取次を頼んだ。

漢の天子の使いと聞いて、幾重もの美しいとばりの中で眠りについていた楊貴妃の魂は驚いた。

衣装をまとい枕を押しやって起き上がり、しばらく躊躇してから玉の簾や銀の屏風を次々に開いて現われた。

雲のような髪は少し崩れて目覚めたばかりの様子。花の冠も整えないまま堂に降りてきた。

風が吹いて仙女の袂はひらひらと舞い上がり、霓裳羽衣の舞を舞っているようだった。

玉のような美しい顔は寂しげで、涙がぽろぽろとこぼれる。梨の花が一枝、雨に濡れたような風情である。

楊貴妃は、思いのこもった眼差しで、君王に謝辞を述べた。

あの別れ以来、声も姿も両共に遠いものとなりました。

昭陽殿での恩愛も絶え、この蓬莱宮の中で過ごした時間も長くなりました。

振り返って人間世界を見下ろしてみても、長安は見えず、霧や塵もやが広がるばかりです。

今はただ思い出の品によって陛下に私の深情を示します。螺鈿の小箱と金のかんざしを形見にお持ちください。

かんざしの脚の片方と小箱の蓋をこちらに残しましょう。かんざしの小金を裂き小箱は螺鈿を分かちましょう。

金や螺鈿のように心を堅く持っていれば、天上と人間界とに別れた私たちもいつかは、また会えるでしょう。

楊貴妃は、別れに際し、ていねいに重ねて言葉を寄せた。その中に、王と彼女の二人にだけにわかる誓いの言葉があった。

それは七月七日の長生殿、誰もいない真夜中に親しく二人で語り合った時の言葉であった。

「天にあっては願わくは比翼の鳥となり、地にあっては願わくは連理の枝となりましょう」と。

天地は悠久といえどもいつかは尽きる。でもこの悲しみは綿々と続いて絶える時はこないのである。

資料４　「長恨歌伝」あとがき

「歌既成，使鴻传焉。世所不闻者，予非开元遗民，不得知。世所知者，有《玄宗本纪》在。今但传《长恨歌》云尔。」

訳文

「歌既に成り、鴻をして伝えしむるなり。世に聞こえざる所は、予、開元の遺民に非ざれば、識ることを得ず。世に知る所は、『玄宗本記』の在る有り、今但だ『長恨歌』を傳ふと云うのみ。」

白居易

資料５　李益「過馬嵬二首」

路至墻垣问樵者，顾予云是太真宫。太真血染马蹄尽，
朱阁影随天际空。丹壑不闻歌吹夜，玉阶唯有薜萝风。
世人莫重霓裳曲，曾致干戈是此中。
金甲银旌尽已回，苍茫罗袖隔风埃。浓香犹自随鸾辂，
恨魄无由离马嵬。南内真人悲帐殿，东溟方士问蓬莱。
唯留坡畔弯环月，时送残辉入夜台。

訳文

「壁垣に至る路を樵者に問う、願わくば予是を太真宮に伝えん。太真血に染まり馬蹄に尽く、朱閣影隨い天際空し。丹の壁は歌を聞かず、玉階は唯苔蔦に夜風の吹くのみ。世人霓裳の曲を重んじるなかれ、かつて是此の中に干戈に致る。
金甲銀の旌は回り尽くし、蒼茫の羅袖は風埃を隔てる。沈香は猶天子の車に随い、恨魄は馬嵬を離れ失われた。

南内の真人帳殿に悲しみ、東溟の方士蓬莱を問う。唯坡の畔環月の器に留める、時を送り残輝夜台に入る。

資料６　「渓嵐拾葉集」抜粋

「渓嵐拾葉集」巻６　抜粋

「問。以我国習蓬莱宫方如何　答。唐玄宗帝共楊貴妃至蓬莱宫。其蓬莱宫者。我国今熱田明神是也。此社壇後有五輪塔婆。五輪銘釈迦種子金字書。此塔婆楊貴妃墓也熱田神義見」

訳文

「問い。我が国を以て蓬莱宮とは如何なる方であるか？　答え。　唐の玄宗帝と楊貴妃は共に蓬莱宮に至った。この蓬莱宮とは、我が国の今の熱田明神である。この社の壇の後に五輪の塔婆がある。五輪の銘は、金字で釈迦種子と書かれる。この塔婆が楊貴妃の墓であると熱田神義に見える。」

資料７　李白「清平調詞三首　其一」

雲想衣裳花想容　　雲には衣裳を想い　花には容を想う
春風拂檻露華濃　　春風　檻を払らって　露華濃まやかなり
若非羣玉山頭見　　もし群玉山頭に見るにあらずんば
會向瑤臺月下逢　　会ならず瑶台月下に向かって逢わん

意味

雲を見ては楊貴妃の衣裳を想い、牡丹を見ては楊貴妃の容顔を想う。春風は欄干のあたりを払い、露の光は光って、しっとりと花上に置かれた。これほど美しいひとは、もし郡玉山上で会うのでなかったら、きっと瑤台の月の下でしか会えないだろう。

※注
群玉山は、西王母が居る処とされる山。
瑤台も、王母が暮らすという美しい高楼。

資料8　杜甫「奉同郭給事湯東靈湫作　其二抜粋」

翠旗澹偃蹇，雲車紛少留。
簫鼓蕩四溟，異香泱漭浮。
鮫人獻微綃，曾祝沉豪牛。
百祥奔盛明，古先莫能儔。
坡陀金蝦蟆，出見蓋有由。
至尊顧之笑，王母不肯收。
複歸虚無底，化作長黄虯。

翠旗澹として偃蹇たり　雲車粉として少しく留まる。
簫鼓四溟を蕩かす　異香泱漭として浮ぶ。
鮫人微綃を献じ　曾祝豪牛を沈む。
百祥盛明に奔る　古先も能く鱒する莫し。
披陀たる金の蝦娯　出見する蓋し由有り。
至尊之を顧みて笑う　王母収め遣めず。
復た虚無の底に帰し　化して長き黄札と作る。

意味

天子の翠旗がおごそかにやってくると、雲の車は少し入り乱れながら留った。
簫や鼓の音が周囲を振わせ、えもいえぬ香りが辺り一面に広がっている。
鮫人（船人）は薄絹を献じ、祝いに豪牛を沈めている。（神に捧げる生贄）
いろいろな性質を持った者が、それぞれに活躍している。古来、こんな時代があったことはない。
でこぼこの金色のガマガエル（安禄山）が出現したのも、当然というべきであろう。

皇帝（玄宗）は、之を顧り見られてお笑いになられた。
王母（楊貴妃）は、（安禄山を）つかまえさせもしない。
そこで、ふたたび虚無の底へ帰ってしまって、長く黄色い蛟と化してしまった。

資料9　清少納言「枕草子」紫式部「源氏物語」抜粋

清少納言　「枕草紙」

梨の花、よにすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひに言ふも、げに、葉の色よりはじめて、あいなく見ゆるを、唐土には限りなきものにて、文にも作る、なほさりともやうあらむと、せめて見れば、花びらの端に、をかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。楊貴妃の、帝の御使ひに会ひて泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり。」など言ひたるは、おぼろけならじと思ふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。

紫式部　「源氏物語」

かの贈物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけん、しるしの釵ならましかば、と思ほすも、いとかひなし。たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく
絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければ、いとにほひすくなし。
大液の芙蓉、未央の柳も、げに、かよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。

朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、尽きせず恨めしき。

資料10　能「楊貴妃」抜粋

地　「そよや霓裳羽衣の曲、そよや霓裳羽衣の曲そぞろに濡るゝ袂かな」
シテ　「何事も、夢まぼろしの戯れや」
地　「あはれ胡蝶の、舞ならん」
シテ　「それ過去遠々の昔を思へば、何時を出生の始めと知らず」
地　「未来永々の流転。更に生死の終りもなし」
シテ　「然るに二十五有の中、いづれか生者必滅の理に洩れん」
地　「まづ天上の五衰より、須弥の四州乃さまざまに、北洲の千年つひに朽ちぬ」
シテ　「いはんや老少、不定の境」
地　「歎きの中乃、歎きとかや」
シテ「我もそのかみは、上界の諸仙たるが、往昔の因みありて、仮に人界に生まれ来て、楊家の深窓に養はれ、未だ知る人なかりしに、君聞し召されつゝ、急ぎ召し出し後宮に定め置き給ひ、偕老同穴の語らひも縁盡きぬれば徒に。又この島にただ一人、帰り来りてすむ水乃、あはれはかなき身の露乃、邂逅に逢ひ見たり。静かに語れ憂き昔」

※注　能用語　シテ「主人公」の事　地「地謡」コーラス

解説1　西王母について

西王母は、中国で古くから信仰された仙女・女神、絶世の美女で、全ての女仙の統率者である。西方の崑崙山に棲むと言われ、太陽と月の支配者でもある。死をつかさどると言われ、不老不死の象徴でもあり、不老不死の妙薬である仙桃を持つ。道教では至上の女神として、太真西王母と称される。唐代の詩人、段成式は、その著書「酉陽雑俎」の中で、西王母の本名を「楊回」であるとしている。

解説2　董双成について

董双成は、西王母の身辺に仕える侍女、又は、娘と言われ、西王母の持つ仙桃の番人である。笙の名手であるともされている。中国では、古くから人気の仙女で、李白の詩、「桂殿秋」では、「仙女下，董双成，汉殿夜涼吹玉笙。曲終却从仙宮去，万户千门惟月明。」訳「仙女、董双成は下りて、漢殿の夜は、涼しく、玉笙を吹く。曲を終わって、仙宮に去れば、万戸、千門、ただ、月明かりのみである。」と詠っている。

解説3　西王母と武帝の伝説について

武帝は、漢朝第7代の皇帝であるが、中国歴史上では仙道を信仰した皇帝として知られている。
「七月七日那天听闻西王母即将降临宫殿而赶忙做好迎接西王母的准备，到了七月七日深夜二更时，西王母驾乘着紫云车降临到汉武帝的宫殿。汉武帝将西王母迎接到宫殿后，西王母则赠予汉武帝七颗仙桃与之享用（有的文献则说是5枚仙桃）。」（中国版ウィキペディア　西王母より）

訳

「七月七日、とつぜん西王母がまもなく降臨するとのお告げを受けて、宮殿内はあわただしく西王母を歓迎する準備を行なった、七月七日深夜二時になって、西王母は駕篭に乗って、武帝の宮殿に降りてきた。武帝は宮殿で西王母を迎えると后として接し、西王母は武帝に七個の仙桃を贈った（五個の仙桃とする文献もある）。」

解説４　「熊野権現縁起絵巻」五衰殿の女御の伝説について

昔、天竺（今のインド）のマカダ国に善財王という王様がいました。王には千人の妃がありましたが、いまだ子宝に恵まれません。五衰殿に住む女御は、千人の后のうちの一人です。いまだ王から一度も訪ねてもらえないことを悲しみ、一心に十一面観音にお祈りしました。するとその功徳により、女御は王の寵愛を受けるようになり、やがて王の子を身籠ったのでした。一方、九九九人の妃たちは、女御を激しく嫉妬します。にせの占いをさせるなど、女御を陥れようとしますが、なかなかうまくいきません。そこで妃たちは、九九九人の大女に鬼の姿をさせ、悪王子が生まれることを悲しむ神仏の使いだといって、二人のもとに乱入させます。王は仕方なく、女御のもとを去っていきました。

それでもなおあき足らない九九九人の妃は、七人の武士に命じて、五衰殿の女御の暗殺をくわだてます。山の奥深く連れ出された女御は、首を斬られる直前に、王子を出産します。女御はすぐに首を落とされますが、王子は母の遺体の乳を吸い、動物たちに護られ、すくすくと成長します。三年の歳月が流れた頃、山の麓に住むちけん上人が文机に経典を広げると、虫食いが文字のように見えています。それは女御の霊が虫に化身して刻み付けた、王子救出を上人に託す歌だったのです。

山に入ったちけん上人は、やがて蓮華に乗り瑞雲をともなった王子を見いだします。王子は、これまでの

経緯を上人に伝え、ともに女御の遺体を火葬した後、山を下りました。寺に入って学問を積み、やがて父の善財王と対面がかないます。王は、九九九人の妃を問い詰め、女御の首のありかを白状させ、王子と母とは、悲しい再会を果たします。しかし十一面観音の利益によって女御は蘇生し、親子三人とちけん上人は、憂き国を捨てて遠く日本の熊野めざして飛び立ったのでした。家来たちも次々と飛び立ちます。九九九人の妃も後を追おうとしますが、護法善神に大岩を投げつけられ、つぶされてしまいます。マカダ国を旅立った一行は熊野に到着し、善財王が早玉宮（本地・薬師如来）、五衰殿女御が結宮（本地・千手観音）、ちけん上人が証誠殿大菩薩（本地・阿弥陀如来）、王子が若一王子（本地・十一面観音）となって、今もこの地に鎮座しているのです。

わかやま絵本の会「くまののかみさま」巻末付録　解説（高橋修　和歌山県立博物館学芸員）より

解説５　お柳さんの伝説について

楊子薬師堂由来

楊子薬師如来の来由は、京都三十三間堂棟木之霊地として、頭痛、平癒、病脳療活に顕著なる霊場なり、二条天皇の永暦年中の頃（八一四年前）先帝後白河上皇が頭痛の為再々お苦しみました。上皇はおんみずから都の因幡堂にお籠りになり、平癒を祈願なさいました。

或る夜、金色の御仏が現われて「我は薬師如来である。熊野川のほとりに高さ数十丈の大楊樹あり、かの楊をきり都に大伽藍を建立し、かつ我が像を彫刻し、まつれば頭痛たちどころに、癒えよう」と、上皇は大変お喜びになり、早速その大楊を切らせましたが、あまりに長く大きいので、動かすことも出来ませんでし

た。困り果てゝいたところ、不思議や水中から天女現われ出て神力で軽々と京まで運ぶことが出来ました。「柳のおりゅう」とのことです。長寛二年大伽藍を建立しました。

今にいう蓮花王院即ち三十三間堂であります。ために上皇の頭痛は平癒しましたので上皇は歓喜して、熊野楊枝の郷の楊の切り跡にも七堂伽藍を建立され、上皇直作の薬師如来を本尊とあがめ、仁安二年九月十一日、法皇となられ、自ら大導師となって開眼供養を、なされ頭痛山平癒寺と号されました。

その後度々火災にあいましたが、奇蹟にも本尊薬師如来は今にのこり、お祭りされています。悪事災難をまぬがれ、特に頭痛、平癒、来世は極楽浄土へお導き下さる。ありがたい薬師様であります。全国各地より、今なお参詣の信者はあとをたちません。

昭和五十年二月

三重県紀和町「楊子薬師堂」の立て看板より

今熊野観音寺縁起

平安時代弘法大師が熊野権現より観音尊像を授り嵯峨天皇の勅願により開運厄除の寺として開創された名刹です。

後白河法皇は本尊十一面観音を深く信仰され霊験によって持病の頭痛が平癒したので特に「新那智山今熊野」の称をこの寺におくられました。

それより頭の観音さんとして知られ病気封じ智恵授り諸願成就の寺として広く信仰されています。

京都東山「今熊野観音寺」の立て看板より

後白河上皇は御持病の頭痛を当山の観音さまの御夢告によって平癒されたので、爾来世の人々からも頭痛封じの観音様として尊崇されるようになりました。

「今熊野観音寺」のオフィシャルサイトより「後白河上皇と観音寺」の記事抜粋

製作　蓑虫工房
和歌山県田辺市龍神村小家 972-36 アトリエ龍神の家２C
電話・ファックス 050-3444-4776 Email:minomusi@ztv.ne.jp

龍神楊貴妃伝　http://www.minomusi.net/youkihi/
龍神村楊貴妃伝説（フェイスブック）
https://www.facebook.com/ryujinyoukihi